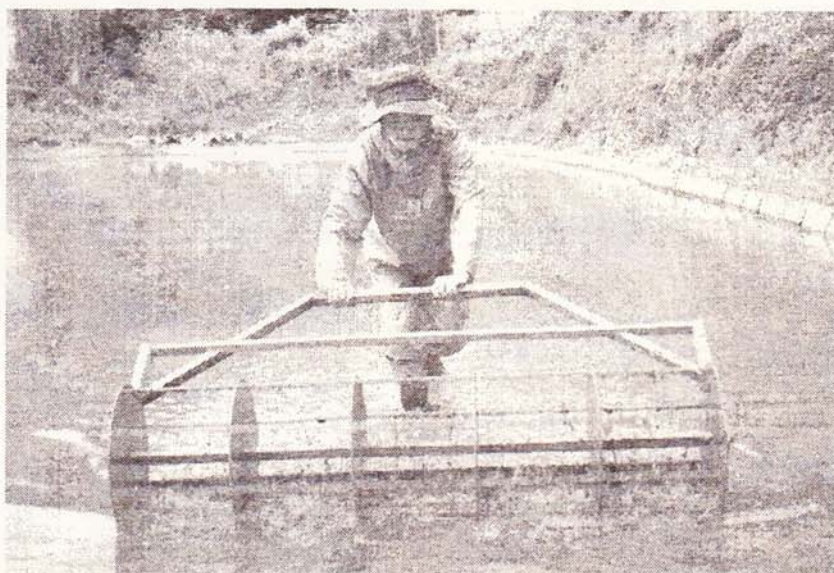


伊那谷スケッチ

～自然と文化を巡るふるさと再発見～ 第三十一回



休耕田を耕し、やっともうすぐ田植え。黒ノ田井水の水を利用している。

前島久美

今年は気温が低く、雨もなかなか降らない日が続いた。毎年、春まきの蕪や大根を栽培している紙谷正さん（下青木）の畑では「とうだち」が目立った。野菜が十分に育たないまま、花芽をどんどん付けていく。小松菜かな、と思っていたものが蕪の「とうだち」でびっくりした。紙谷さんも「こんなことは初めてだ」と、驚いた様子だった。90を越える方がおっしゃるのだから今年は相当珍しい年なのだろうと思う。

新たな土地で

昨年の秋から上蔵（わぞ）に住み始めた。上蔵は大河原の中心地から車で5分ほどの高台にあり、福德寺や大河原城址跡など旧跡がある観光スポットだ。すり鉢状の地形に民家が並ぶ。集落にはいつも季節の花々が彩りを添えており、その風景に住民の暮らしぶりの丁寧さがうかがえる。上蔵の上空はどこかの航空会社の飛行ルートとなっていて、上空から見下ろした風景があまりに綺麗なので調べて来村したパイロットがいたくらいだ。自宅はそんな上蔵の中心地から更に車で5分ほど上ったところにある。購入

した家には7瀬ほどの田んぼが付いていて、しばらく休耕田だったようだが今年から挑戦してみることになった。4月、黒ノ田井水の組合に加入した。

「平成29年度 黒ノ田井水の作業をやりませう。出席をお願いします。5月4日8時にM宅上集合 持ち物 モンキー、スパナ24、ジョレン、バッチヅル、剣ヅコ」という通知が来た。持ち物としてあげられているもので認識できたのは唯一、ジョレンだけだった。どんな作業になるのか想像もできないまま当日ジョレンを握りしめて参加した。組合メンバー6人が揃った

ところでそれぞれの分担が割り振られる。私は言われるがままにSさんの車に同乗させてもらい、黒ノ田沢まで移動することになった。

黒ノ田沢は上蔵集落から鳥倉林道を30分ほど登った辺りに出現する。林道のぐねぐねの道を上りながら、Sさんは井水組合のことや、黒ノ田街道のことを教えてくれた。上蔵には昔から水がないことも初めて知った。今でこそ集落には田んぼの風景もあるが、かつては雑穀の栽培が主流で、米作りをするということは悲願だったそうだ。

村史を開けば、黒ノ田井水は明治20年にひらかれたとある。車がなかった当時は山道を何回も往復しながら(時には作業小屋を構えたというが)の作業であった。「今は道ができて車で上流までいけるで、この年でもなんとかやられるけど、昔は大変だった」とSさん。村史には明治期にこの井水開削に賛同したのは15口とあるので、当時から考えると井水関係者の減少が著しい。現在の組合員で田んぼを作っている人は3分の1いるかいなかだ。今日までの減反政策やそれに伴う転作、もちろん人口減少に伴う担い手の消失という理由も想像がつく。

黒ノ田街道をいく

黒ノ田沢の上流に降り立つとKさんと一緒に水を引くパイプに損傷がないかを確認しながら下っていくことになった。Kさんは森林関係のお仕事を長年されていたそうで足が早かった。気を抜いたら遅れると思い少し呼吸を早めてKさんにペースを併せる。しばらく沢沿いに下っていくとトラバース道になる。今でこそ水は黒パイプで引かれているが、一番昔は木製で次がコンクリート、そして黒パイプになったという。黒ノ田街道は今までに何回か歩いているが地形が独特だ。平坦な段が急峻な斜面に挟まれている。井水は平坦な所にうまく設置されている。Kさんも関心していたが、明治期に手弁当の測

量器具と原始的な土木工法で集落までのこの距離(約4^{km})を完成させたものだ。春の風景を楽しみながら進む。ところどころ崩壊しているところもあるが快適な道のりだ。新緑にはまだ早く、ヤマツツジのピンクがところどころ見頃を迎えている。これまで何十年もこの作業に参加しているKさんだが、毎年ここからの眺めが楽しみだという、赤石岳絶景スポットも紹介してもらった。

今年破損箇所はないかと思われたが、一カ所水がもれ出ているところを見つけ、午後まるまる4時間あまり皆で修復に充たることになった。パイプを壊していたのは木の根っこ。少しの間からパイプに入り込んで何年もかけて大きくなるのだろう。毎年どこかが割れるそうだ。2017年度判は、狸っぽい形状のものが取り出された。はじめてなので物珍しく、自宅まで持ち帰った。

家の近くには小さな畑もあって少しずつ耕している。今春、紙谷さんからいただいた里芋の種も植えてみた。ところが4月の中頃に植えて5月の中頃に差し掛かってもなかなか芽がでてこない。標高差からくる気温の違いなのかと思い、周りの畑を覗くと里芋の芽はあおあおと順調そうに見えるのでそんなこともないのかな、と思う。紙谷さんに相談すると「それぞれだで、あまり期待しすぎてもいかん」と一言。現在、里芋は8割方ちゃんと発芽して、ぷりっとした緑色の葉っぱに朝露を漬えている。種は状況が整った時にちゃんと動き出すようになっているらしい。この地で農作業を介して教わることはこれからも多そうだ。

※初号は「大鹿スケッチ」として2009年から連載。2012年からは「伊那谷スケッチ」として東京・国立のミニコミ誌「並木道」(休止中)に掲載。旅舎右馬允のHPにてアーカイブスの閲覧が可能。